

ヴィヤール・ド・オンヌクルの画帳：西洋中世の 画論から

前川，誠郎

<https://doi.org/10.15017/2543249>

出版情報：哲學年報. 23, pp.553-569, 1961-09-20. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

ヴィヤール・ド・オンヌクルの画帳

——西洋中世の画論から——

前 川 誠 郎

〈この書物から知られるように、私は多くの国へ行つたが、何処であれラーンの塔ほどの塔をみたことがない。〉
(XVIII) (第一、二図)

今ここに紹介しようとするある不思議な書物の中で、かような言葉をもつて私たちに話しかけてくる此の人は、一体誰なのであろうか。その人の名はオンヌクルのヴィヤール。オンヌクルとは白耳義寄りの北仏ピカルディー地方の一都市カンブレリーの南方にある小村であるが、今日では僅かに此の人の名との繋りにおいてのみ世に知られるに過ぎない。そして又実は此の人それ自身に關しても、画帳 (album)^(註一) と呼ばれるこの書物一冊を除いては、他に殆んど何一つ信用すべき資料が伝わってはいないのである。彼は故郷の近くの町サン・カンタンの僧会聖堂の祭室（一七五七年献堂）を造つたといわれるが、そのことも今残っている此の画帳の内容からは確める術がない。また画帳には〈ヴィヤール・ド・オンヌクルとピエル・ド・コルビーにより設計された二重周廊をもつ聖堂〉と特記した祭室の平面図 (XXIX) が載っているが、これも実際に何処かに建てられたものなのか、それとも単なる構想に留るものなの

か、は全く不明である。画帳に出てくる地名には故郷近在の町カンブレーをはじめラーン、シャルトル、ランス、ヴェーセル、モー、ローザンヌなどを挙げるができるが、その殆んどすべてにその地の建築の見取図や飾り窓などが描かれている処を見ると、彼が一度はそれら各地を實際に訪れたものと考えてよいであろう。それらの中、六頁を費して最も詳しい記述を行っているランス(第三、四図)では、大聖堂の身廊部の或る一つの窓について、△私がこれを描いたとき、私は呼ばれてハンガリーへ行く処であった。その故にこそ、私は何にもましてこれを愛した。▽(XX)と記している。このハンガリー行きが、彼の生涯での極めて重要な出来事であつたらうことは、想像に難くない。事實、このことに関しては画帳の中に彼の自筆でもう一度、△かつて私は、私がそこに長らくいたハンガリーで、この(図の)ように作られた聖堂の鋪床(Pavement)をみたことがあつた。▽(XXX)と記した箇処があり、又十五世紀頃のものゝ推定される後人の手蹟で、△ハンガリーへ行つたド・オンヌクール▽(III)という書き込みも見出される。彼が遠くハンガリーまで出掛けた時期や目的については、様々の興味ある説^(註三)が出されているけれども、要するにそれは全く推測に属する問題であつて、ただ彼がハンガリーへ行つたということだけが、私たちに残された事實である。それはともかくとして、彼がそこへ△呼ばれた▽というのは、建築家としての彼の名声が当時相当高いものであつたことを信じさせる。画帳の中からおそらくはその旅次の見聞に基くと思われるものを拾うならば、前記の教会の鋪床の他に、獅子の調教法を記した頁(XLVII)(第十図)や、或はまた△私がかつて見たサラセン人の墓はこの(図の)ようであつた。▽という美しい一葉(XVI)(第九図)などが挙げられるであらう。

此の画帳は、現在巴里の国立図書館に蔵せられるもので、160×240(mm)の大きさの二折版羊皮紙三十三葉からなり、気付葉及び花から採った顔料を保存する薬劑の処方に費した最終葉を除くと、残る三十二葉六十四頁には大小何らかの素描がある。素描は銀筆（又は鉛筆）で描いた上を、インクで明瞭に限取りする遣り方であるが、祭壇の前に花瓶を持って立つ裸体の男子を描いた一頁(XXII)だけは、更にビスターで陰影をつけ唯一の例外をなしている。これらの素描の多くには、ヴィヤールの自筆で説明がつけられていて、それがこの画帳の魅力と価値とを倍加するものとなっているが、例えばカンブレーのノートル・ダム聖堂祭室の平面図を示した頁(XXXIII)では、*⋈*：更に本書の中で諸君は、内部および外部の見取図、ならびに礼拝堂、壁面および扶壁拱の配置図を見られるであろう。*⋈*と述べながら、それに当る素描が見付からなかったり、又強力な弩砲の設計図(LIX)には、別の頁に桿を引いた場合の図解があることを記してあるにも拘らず、それが欠けているなどのことから推して、相当数の紙葉が散逸したものと考えられている。^(註三)

一般にこの手記が、画帳もしくは写生帳などと呼ばれるのは、これらの紙葉が隨時隨処において描かれ記されたものの集積であらうと考えられることから由来しているが、しかしまた、或る一定の目的をもった書物に編もうとする意図なり努力なりも、その成否はともかくとして、明瞭に認められるのである。その最大の理由は、これまで引用した中の二つの簡処(XVIIII)(XXXIII)からも分るやうに、*⋈*本書の中に *en cest liure*^(註四)*⋈*と^(註四)う言葉がよく使われていること、また序文と見做しうる次の文章が冒頭(H)についていることである。曰く、*⋈*ヴィヤール・ド・オンヌクルは諸君に挨拶し、本書の中に、見出される考案を利用しようとする総ての人々に、彼の魂のために祈り、また彼を

忘れないようにと願う。何故なら本書の中には、石工の偉大な力や木工の用途に関する多くの助言が見出されるであろうから。また諸君は、幾何学の教えに従った素描について有力な助けを見出すであろう。▽ かような一見相矛盾する二つの性格、即ち一方には偶然の堆積という感の深い雑多な対象と、他方にはこれらを統合して一書に編もうとする明確な意図と、の存在は、当然さまざまの推測を許すのであるが、十三世紀前半という古い当時は勿論のこと、更に時代を下げて他に殆んど類書を欠くという特殊な事情が、この問題の適確な解決を著しく困難としているように見受けられる。

○

この画帳は、西洋美術史上大そう名高いものであるにも拘らず、その全貌について知ることは必ずしも容易ではない。前世紀の中葉以降、英仏奥の三国でそれぞれ刊行された複製本の中、最も新しいハーンローザー教授の校訂本（一九三五年、ウィーン刊）^{（註五）}が、その綿密な研究と相俟って今日定本と称すべき存在となっているが、現在ではすでに稀覯に属し、我が国に於ては何処でこの書物を見得るのか、私は知らない。尤もこの事情は米国においても似寄つたものであるらしく、最近（一九五九年）インディアナ大学から普及版とも言うべきボウイー氏の編纂本^{（註六）}が出たのは、従来この難点を解消しようとする処に主旨が置かれているようである。しかしボウイー氏は、これを単なる廉価版とするだけでは満足せず、思い切つて主題別分類法を採用し、頁の配列を大きく変更している。こうすることによつて、手記の錯雑した現在の姿から、これを一定の性格をもつた書物にしようとする原著者ヴィヤールの意志を、浮かび上げさせる一つの試みがなされたわけである。しかし私のようにボウイー氏版だけを頼りにして、手記の全貌を

成るべく詳しく知ろうとするためには、その巻末に附された対照表を使って、一度原手記の順序通りに頁を配列し直して見なければならぬ。それを行つたのが次に示す表である。

(第一表)

葉	頁	主 題	Bo- wie	分 類
1	I	ペリカン, 司教, 梟, 鵠, 怪獣	1	動, 宗
	II	十二使徒, 外套の男, 頭巾の女, 宙返りの女	2	宗, 俗
(2)	III	蝸牛, 騎士立像	20	動, 俗
	IV	十字架の基督	9	宗
3	V	未完成素描(十字架他)	63	宗, (建?)
	VI	躓く自負, 謙讓	13	喩
4	VII	熊, 白鳥, 天上の都	33	動, 建
	VIII	教会の勝利(女性立像)	5	喩
5	IX	無限運動の機械	62	考
	X	葉形頭首, 带状文, 葉	26	文
6	XI	サラセン人の墓	27	建
	XII	時計塔, ドラゴンS字	51	建, 文
7	XIII	朗読台	52	建
	XIV	ばった, 猫, 蠅, とんぼ, えび, 迷宮	34	動, 考
8	XV	十字架の基督(二及び未完成一)	10	宗
	XVI	二人の騎者	19	俗
9	XVII	猪, 兎, 将棋する二人, タンタル スの盆, 火鉢	28	動, 俗, 考
	XVIII	ラーンの塔と天蓋, 鬚のある男	39	建, 俗
10	XIX	ラーンの塔(見取図)	40	建
	XX	聖母子, ランスの窓	42	宗, 建

葉	頁	主 題	Bo- wie	分 類
11	XXI	王座の基督, ドラゴンと渦文	3	宗, 動, 文
	XXII	祭壇の前に花瓶を持って立つ男子裸像	23	俗
12	XXIII	ソロモン王の裁判を受ける婦人の一人	11	宗
	XXIV	君侯, 司教, 東方の博士の一人	12	俗, 宗
13	XXV	王, 侍従, 兵士	15	俗
	XXVI	十字架降し, 翼のある獅子と牡牛	8	宗
14	XXVII	鷹を持つ君侯と夫人	16	俗
	XXVIII	ヴォーセルのシトー派聖堂, 躓き給う主	17	建, 宗
15	XXIX	二重周廊式祭室(平面図), モーの聖ステファン(平面図)	48	建
	XXX	鋪床, 柱(平面図), シャルトル聖堂ばら窓	49	建
16	XXXI	ローザンヌ聖堂ばら窓, 予言者	50	建, 宗
	XXXII	王座の基督	4	宗
17	XXXIII	相撲する二人, シトー派聖堂(平面図), カンプレー聖堂(平面図)	41	俗, 建
	XXXIV	屋根組三, 燭台	60	建, 考
18	XXXV	鬚の男, 幾何図形による素描六	35	俗, 幾
	XXXVI	幾何図形による素描十二	36	幾
19	XXXVII	幾何図形による素描十三	37	幾
	XXXVIII	幾何図形による素描六	38	幾
20	XXXIX	幾何学又は測量術十八	55	幾
	XL	幾何学又は測量術十二	56	幾

葉	頁	主 題	Bo- wie	分 類
20	XLI	幾何学又は測量術八	57	幾
	XLII	幸運の輪(幾何図形による素描)	見返し	幾
22	XLIII	男子裸像二, 葉形頭首二	25	俗, 文
	XLIV	機械の考案五	58	考
23	XLV	機械の考案四	59	考
	XLVI	うづくまる使徒(又は主), 馬に乗ろうとする兵士	18	宗, 俗
24	XLVII	獅子の調教	31	動, 俗
	XLVIII	獅子, 針ねずみ	32	動
25	XLIX	王座像	14	俗
	L	救世主, 兵士二人	21	宗, 俗
26	LI	いんこ二羽, 楽師裸像, いんこを持つ女, 犬	22	動, 俗
	LII	獅子と闘う三技者	29	俗, 動
27	LIII	獅子と闘う技者, 聖コスマスと聖ダミアノの殉教	30	俗, 動, 宗
	LIV	椅子二, 使徒立像	54	建, 宗
28	VL	使徒, 予言者(ともに立像)	6	宗
	LVI	基督の笞刑, ピラトの許へ連れられる基督, 笞者三	7	宗
29	LVII	椅子	53	建
	LVIII	着衣男子立像	24	俗
30	LIX	機械の考案(カタパルト)	61	考
	LX	ランス大聖堂礼拝堂(見取図)内部	43	建

葉	頁	主 題	Bo- wie	分 類
31	LXI	ランス大聖堂禮拜堂(見取図)外部	44	建
	LXII	ランス大聖堂身廊(見取図)外部及び内部	45	建
32	LXIII	ランス大聖堂の柱(平面図)その他五	46	建
	LXIV	ランス大聖堂側廊扶壁拱(見取図)	47	建
33				

本表中、分類の欄に使った略語は、次の意味をもつ。

宗……宗教関係図像、特に人物。

俗……風俗

動……動物

建……建築(調度類も含む)

考……機械等の考案

喩……寓喩

幾……幾何学及びその応用図形

文……文様

葉番号に括弧を施したものは、ポウイー版だけではなお疑点の存する箇處であることを示す。

なお念のため、次にポウイー番号と現行頁との対照表を掲げておく。^(註七)

(第二表)

Bowie	頁	Bowie	頁
1	I	33	VII
2	II	34	XIV
3	XXI	35	XXXV
4	XXXII	36	XXXVI
5	VIII	37	XXXVII
6	LV	38	XXXVIII
7	LVI	39	XVIII
8	XXVI	40	XIX
9	IV	41	XXXIII
10	XV	42	XX
11	XXIII	43	LX
12	XXIV	44	LXI
13	VI	45	LXII
14	XLIX	46	LXIII
15	XXV	47	LXIV
16	XXVII	48	XXIX
17	XXVIII	49	XXX
18	XLVI	50	XXXI
19	XVI	51	XII
20	III	52	XIII
21	L	53	LVII
22	LI	54	LIV
23	XXII	55	XXXIX
24	LVIII	56	XL
25	XLIII	57	XLI
26	X	58	XLIV
27	XI	59	XLV
28	XVII	60	XXXIV
29	LII	61	LIX
30	LIII	62	IX
31	XLVII	63	V
32	XLVIII	見返し	XLII

第一表をみて直ちに気付くことは、紙葉番号18 19 20 21と30 31 32との二組は、それぞれの組の内部で主題にもほぼ一貫性があり、現在のままで或る程度著述の体際をなしているということである。また紙葉番号6 7、9 10、15 16、26 27などの各組は、同一かも知しくは近似する主題が、各二枚の紙葉の表裏何れかに亘つて連続している。これらも、主題の連続という点で、僅かながらも書物らしい性格を帯びている処かも知れない。何分にも羊皮紙という高価な材料への顧慮の故であろうが、余白を剩さずに利用してあるので、手記の内容は全く混沌錯雑たるものとなつては、後世長い年月に亘つて伝来する間には、多くの紙葉が散逸し、また残つたものにも各様の改変が加えられているに違いない。そのような現在の形の中から、本手記の性格とかその成立の過程などを手探りしようとするのは、至難事と言わなくてはならないが、それでも猶、一、二見当がつくかと思われる点がある。例えば、第一表によって同一紙葉

の表裏に亘りボウイー番号の連続するものを探すと、十一葉が見付かるが、この中前述したように18 19、20 21、31 32の六葉では、内容体際ともに書籍としての性格が濃い。他方、これらの十一葉を除いた残りの二十一葉は、表裏の主題にはつきりした相違のあるものが多く、これらは最初に片面だけが描かれた後、別の機会に残りの面が使用されたのではないかと考えられる。従つてまた写生帳的な偶然性が強いわけである。紙葉の表裏ということを規準として見た場合、以上のような二つの性格が区別せられ、しかも後者の写生帳的性格の方が優勢であるということが出来るのではあるまいか。

現在の紙葉番号が何時頃付けられたものかを、私は詳かにしないのであるが、ともかく紙葉の片面にアラビヤ数字で記されたものがそれであつて、これを各葉表裏二頁ずつに換算すると、頁番号（羅馬数字）が出てくる。処で第一表から察するに、現在の雜然とした紙葉の配列も、その底には一応主題別の基準がとられていると考えられる。何故なら、主題別のボウイー番号が、十五箇処も連続するからである。それから又紙葉の中には、ゴシック字体でアルファベット番号をつけられたものがあるが、私が写真から判読しうる処では、a から i までの順は現在の頁番号 I から IX までに符合している。この字体はアラビヤ数字の字体よりも大分旧いものと思われるので、アラビヤ数字を用いて現在の葉番をつけた人が、その編輯に當つて、それ以前のアルファベット番号を顧慮した結果、（序文のある第一葉は当然として）すくなくとも現在の第二葉から第五葉までの配列が出来たのであつたらうと推定される。しかし例えば28、522などの各二葉は、その内容がそれぞれ相似しているので、現在よりもっと近接した場所に配置される可能性をもっている。このようにして、序文などに見える著者ヴィヤールの意向を汲み、手記の配列を組替えてみ

たものが、次に示す一試案である。(数字は葉番号。) こうすることによって幾らかでも書物としての体際ははつきりして行くかと思われる。

(第三表)

1	8
6	3
7	4
9	11
10	12
15	13
16	25
17	28
30	23
31	14
32	5
18	22
19	24
20	26
21	27
2	29

配列の標準としては、最初に序文(1)次いで建築(6—32)、幾何学(18—21)、宗教又は世俗関係図像(2—14)、文様、風俗その他(5—29)という順序をとった。この試案に多くの難点があることは申すまでもないが、特に同系統の主題を扱い乍らも表裏で著しく様式を殊にする6や11などの葉は、矢張り表裏で主題の違うものと同じく、便宜の余白を利用したことから、様式の差異が生じて来たと考えられる。

○

第三表の上から三番目の区劃、即ち宗教または世俗関係図像(2—14)の処で特に目立つことは、着衣像の衣襖(ひだ)の描写に極めて顕著な様式的特徴が見出されることである。つまり、ひだのたるみが細長い匙形の曲線を作つて重つたり、或は袖口や裳裾が深い開口部をなして広がる様は、時に煩瑣な感じもするが、弾力に富んだ優美さがあつて非常に印象的である(第十二図参照)。しかもこの様式は、単に聖像とか王侯貴顕のまとう寛衣だけではなく、兵士や衆庶の日常に着用する短い緊衣に至るまで、程度の差こそあれ、殆ど例外なく用いられて、これがヴィヤールの様式そのものであるかの如き感じをさえあたえる。

ただしその使用が余りに頻繁であるために、やや様式化 *Stilisierung* の臭味があることは否定できない。私はヴィヤールの当時の他の例を知らないのですが、これが彼個人の画癖なのか、それとも当時一般の様式であつたのかについては、何ごとをも言い得ないのであるが、彼より約二百年ほどおかれて、十五世紀初頭約三十年間の南独乙の初期木版画（第十三図参照）に、これと著しく似通つた衣裳の処理が認められることを注意して置きたい。この種の木版画は一般に「柔軟様式 *Weicher Stil*」と称せられる範疇に属するもので、同じ頃の彫刻―特にそれだけで独立した小型の礼拝像―と密接な関係があり、幾重にも重り合つて波の如く起伏する豊かな衣裳に特色がある。しかし柔軟様式ではその衣服の中につつまれる肉体の輪郭もはつきりとは握み得ないほどであるに對して、ヴィヤールの場合はこの点を明確に察知することが出来る。また全体の印象も柔軟様式とは大いに異つてゐる。要するにこの兩者の相似する点は、匙形の曲線の使用といふことにあるのであろうが、このようなひだの曲線が、二世紀という間隔をおいて北仏と南独乙に、おそらくは何の相互関係もなく、現れて來てゐるのは非常に面白い事実である。しかしまた一方で考えられるのは、このような形式の相似が生じるためには、夫々の場合にほぼ似通つた条件が存在したのではないか、という点である。ヴィヤールの画帳が描かれたと推定される一三〇年頃、彼がこの画帳で最も詳しい記述を行つてゐるランスの大聖堂では、現今「エリザベート訪問の作家」という名で呼ばれる一人の彫刻家が働いてゐた。彼がこの聖堂に残し、そこから彼の名が由來した「聖母のエリザベート訪問」の彫刻、及び彼から著しい影響を受けたと見られる独乙のバンベルク大聖堂の同じ題の彫刻などを、ヴィヤールの素描と比較すると、そこには見紛うべくもない明瞭な關係が看取できる。特にバンベルクの聖母像では、匙形の曲線がはつきりと彫り出されてゐるのである。ヴィヤールと

「訪問の作家」との間には、何らか相互に影響をあたえうるような関係があったと見るべきである。しかもこの「訪問の作家」が、ランスは勿論、広く全ゴシック彫刻の中でも、最も古典的、な香気の高い様式をもった作家であったこと、或はヴィヤールの画帳の中に例の有名な「サラセン人の墓」(第九図) などという古代彫刻の写生もしくは模写があることなど、さまざまの興味ある問題を含んでいる。南独の「柔軟様式」の場合も、そこに古典芸術との直接の関係はなかったとしても、美術家の眼が写真へと動き出した時代(十五世紀初頭)であり、それが衣襲の処理という問題をめぐって、彫刻から絵画(この場合は木版)への何らかの影響関係が存在して、そこに匙形の曲線の一致という偶然の現象が生じたと考えられないであろうか。

ヴィヤールが当時一流の建築家或は石工であったとしても、同時に彼が一流の素描家であったかどうかは疑問である。しかし又現在の我々の眼をもつて彼の素描の美的価値を判断することは、非常に不当であり危険なことであろう。それはともかくとしても、彼の力強く淀みのない描線は、実にうつくしい。先きに述べた着衣像の衣紋もそうだが、特に彼が建築の見取図や文様の図案を描く時、その線の美しさが、最も処を得て生きてくるように思われる。私たちは例えばレオナルド・ダ・ヴィンチとかアルブレヒト・デュラーなどにその典型が示される多方面な万能人としては、藝術家乃至は人間の在り方が、十五世紀以降のルネッサンス人の大きな特色であると教わつて来た。しかしヴィヤールの画帳の処々に描かれた多くの考案、即ち携帯火鉢(XVII)の如きから弩砲(LIX)や無限運動の機械(XI)に至るまでの、を見てみると、いわゆる万能人なる西洋の人間像の理念が、実は深く中世のうちにまで根差すものであることを、まざまま^{ママ}と知らしめられるのである。一体如何なる興味が無限運動の機械の如きものを考案させるに至つ

たのであろうか。それは中世的理念からすれば、この上ない神性の冒瀆ではなかつたのであろうか。全く不思議なことである。

○

最後に冒頭の図版を簡単に解説しておく。

第一二図 (XVII—XIX)。ラーンの塔。ポウイー氏はこれを大聖堂の北塔であるとしているが、本文からは北塔であることが明かではない。私はむしろ南塔ではないかと思う。図が二葉の表裏に亘り、本文がXXIII頁だけである点に注意せられたい。見取図の中に見える二頭の牡牛と右手の描き方は実に興味深い。牡牛は、ほぼこの位置に置かれた彫刻であるが、右手のことは何とも明瞭ではない。

第三—四図 (LXII, LXIV)。ランス大聖堂。第三図は真中で縦に仕切り、左に外部を、右に内部を描いてある。この身廊は現在の模様と若干相違する処があるので、画帳成立の年代を求める一つの根拠となつて^{疑ハ}いる。右図外観の最上部に描かれた二体の石彫の描法に、次の第五—八図に示された幾何図形法が応用されているのは面白い。なお、この図の本文は、此処には図示しなかつた次のLXIII頁に一部分跨り、しかもその頁の下の文章から先きに読んで行くと言ふ複雑な関係にある。第四図は側廊部のアプスを外から支へる飛扶壁(アルク・ブータン)の構造を図解したものである。

第五—八図 (XXXV—XXXVIII)。この画帳の中で最も有名な箇処である。第六図 (XXXVI) の右下隅に、仕事を容易にするため幾何学により教えられる素描法が、ここに始まる。また石工の方法は他の頁に、と記され、第八

図 (XXXVII) には、△これら四頁には、幾何学の図形があり、これらを理解するためには、各々の特殊な用法を会得するよう心掛けなければならぬ。▽とある処をみると、この描法は一応これら四頁で完結するもののようにである。ここで幾何学的描法というのは、円、弧、三角、正方形などの単純な平面幾何の図形を用いて、人物や動・植物又は建築を素描する方法である。かような方法が果して実用に供されたかどうか、は誰しもの直ちに懐く疑問であろう。甚だ皮肉なことに、画帳の中の多くの素描は、僅か一、二の頭部や手、それに第三図で述べた処を除いては、この方法によつたものであるとは認め難い。^(註七)但しこれらの図式の分析を行つたパノフスキー教授は、これが必ずしも単なる空想の所産ではないことを説いて、実例に第八図 (XXXVIII) 中の e、即ち直角に組合された二箇の正方形を用いた顔の素描法が、ランス大聖堂に現存するステインド・グラスの中の一人物とうまく符号することを述べている。^(註七)私はそれが工芸的図案的な性格の強いステインド・グラスである点に、これらの図式の謎をとく鍵が秘められてゐるのではないかと思う。

第九図 (XI)。サラセン人の墓。サラセン *sarrasin* とは異教徒の意味で、ここではローマ人であろうと云う。^(註十)

第十図 (XLVII)。獅子調教図。△獅子を如何して馴らすか、その方法を記そう。調教師は二匹の犬を連れてゐる。獅子を彼の命令に従わせようとする時、獅子が唸れば、彼は何時でも犬を打つ。これは獅子を大いに惑わせるので、獅子は犬が打たれるのを見ると、意気が挫け、命ぜられた行動をする。もし獅子が怒れば、施す術がない。何故なら、宥めようと威そうと、獅子は何事もしようとはしないから。この (図の) 獅子が実物からの写生であることに注意せよ。^(註十二)

第十一図 (IX)。無限運動の機械。△しはしは工匠たちは、自力で廻る輪を作ろうと努めてきた。これは奇数の木槌と水銀とでそれを作る方法である。▽上にラテン語で△私は言う、アーメン。▽とあるのは、後人の書込み。

第十二図 (VI)。「躓く自負」と「謙讓」。ともに本手記中数の少い寓喩画の例。特に右の女性座像は美しく、私の最も好む処である。ひだの様式も既述の特色がよく出ている。自負 (*orgueil*) は、ラテン語の *superbia* に当るであらう。

第十三図 (参考)。十五世紀初頭の独乙木版画の一例。ミュンヘン、版画館蔵。

註

註一' Album de Villard de Honnecourt, ms. fr. 19093 de Bibliothèque Nationale, Paris.

註二' 一二四二年蒙古軍のハンガリー侵入の結果破壊された多くの聖堂を修理するため、同地へ招かれたという説がある。 cf. *Gazette des Beaux-arts* (1936) P. 266

註三' 現在の葉数 (三十三) ほどが失われたと推測される。従って原本の約半分が今日まづ伝ったこととなる。 cf. *Burlington Magazine* (1936) P. 251f. 及び *Hans Jantzen: Kunst der Gotik* (1957) P. 81

註四' ヴィヤールの用語は、当時の北部フランス語にピカルディー方言が混ざったものであると言われ、拙文中に引用した箇處の訳は、後出ボウイー氏本 (註六参照) の英訳に主として拠り、これを私の読みうる限り手記中の原文と照合させるという方法に従った。ヴィヤールの手蹟は決して難読なものではない。

註五' *Richard Hahnloser: Villard de Honnecourt—Kritische Gesamtausgabe des Bauhüttenbuches. Wien 1935.* この標題が示すように、ヴィヤールの手記は単なる画帳ではなく、大寺院の建造に当りその工事現場に長期に亘り設置される造営所 (*opus, Werk, oeuvre, Bauhütte, chantier* などと呼ばれる) で使用された手本或は教本 *Bauhüttenbuch, livre*

de l'oeuvre であつたところのが、ハーンローザーの研究の核心をなしている。cf. Gazette des Beaux-arts 及び Burlington Magazine (何れも前掲)

註六、Theodore Bowie: The sketchbook of V. d. H., Indiana University 1959.

註七、この第二表は結局ボウイー氏本の巻末にある対照表と同じであるが、誤植と思われる一箇處41の頁番号 XXVIII を XXXIII に改めよう。

註八、cf. Wasmuths Lexikon der Baukunst 4. Bd., P. 157, 159

註九、XLIII頁の獅子の正面図の顔面の輪郭に、円を用いてあるのが明瞭に認められる。

註十、Erwin Panofsky: Meaning in the visual arts, 1955. Plates 24, 25; text P. 85

註十一、Panofsky 前掲書 P. 51

註十二、Jantzen 前掲書 P. 84 参照。ここで写生と云うのは、飽までも中世の理念に基いた獅子の姿であつて、今日の如く寫生ではない。この時代も固有の現実を持つてゐる、とヤンツェンは説いている。それにしては (et) bien sacies q(ue) lions fu contrefais al vif. と断々断つたのは、一体何故であらうか。これ以外の絵はすべて実物に即して (al vif) にならう、と云うのであらうか。

附記。ヴィヤールはヴィラールと発音すべきであらうかと思われるが、今は改めないでおく。